

日常的なやきものから芸術的な釉薬への移行（11～16 世紀）

11 世紀後半になると、美濃の陶工たちは高級な須恵器から、素焼きのシンプルな皿や茶碗などの大衆向けの製品を作るようになった。山の窯跡に捨てられていたことから「山茶碗」と呼ばれている。釉薬をかけた焼き物は、溶け合わないよう一枚一枚を離して焼かなければならない。しかし、無釉の山茶碗は重ねて一斉に焼くことができた。茶碗の底に跡が残っていることからわかるように、各茶碗の間にはそれらを分けるための刳殻が置かれていた。しかし、この方法は必ずしも成功したとはいえず、下の写真のように、いくつかの山茶碗が融合した塊の形で捨てられたものが見つかることが多い。山茶碗の生産は、美濃周辺で約 400 年にわたって行われた。

同じ頃、近隣の瀬戸では別の様式の陶磁器が生まれていた。中国の釉薬を模した「古瀬戸（こせと）」と呼ばれるやきものである。瀬戸の陶工たちは、焼成前の作品に赤褐色の鉄釉を用いて装飾を施すようになる。釉薬をかける前に、まだ湿っている土にスタンプを押したり、乾いた土に模様を彫ったりして、装飾を施すようになったのである。15 世紀頃、瀬戸の陶工が美濃に滞在し、その技術が美濃の窯元に伝わった。現在、小瀬戸は美濃焼の一つの形とされている。